氏　　名	二藤　拓人
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	甲４９７号
学位授与年月日	２０１９年3月３１日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	断片(フラグ)・断章(メシト)を書く ―初期フリードリヒ・シュレーゲルにおける書記の実践と思考の諸相―
審 査 委 員	（主査）前田　良三（立教大学大学院文学研究科教授） 坂本　貴志（立教大学大学院文学研究科教授） 宮田　眞治（東京大学大学院 人文社会系研究科教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

序論
第１部：断章形式の成立
　第１章：断片を読む―18 世紀末における断片の諸相
　第２章：シュレーゲルにおける断章形式の構想
　第３章：断章の文体・書法の成立過程
《間奏》:「文献学」と「哲学」の分析―断章形式の一要素として
第２部：書記の技術としての断章
　第４章：手稿断章群の書記現場（1）―文献学的技法から
　第５章：手稿断章群の書記現場（2）―下線強調の機能をめぐって
　第６章：断章の書記現場（3）―抽象化された概念操作の局面
結論
参考文献

（２）論文の内容要旨

本論文は、初期ドイツ・ロマン派の作家フリードリヒ・シュレーゲル（Friedrich Schlegel, 1772–1829）の 1790 年代から 1800 年代の公刊著作と遺稿、書簡集、講義録を対象に、彼の思考様式と表現方法の中枢を担う「断片・断章（フラグメント）」形式の書記行為の実態を、読み書きに関する文化技術、および編集から印刷・出版にいたる編集行為の分析を通じて明らかにし、書記行為としての断章がシュレーゲルの思考に有する意義を総合的かつ包括的に解明することをめざすものである。

序論では、本論文の目的を明示した後、これまでのシュレーゲル研究を概観し、研究史の中に本論文のテーマと方法論を位置づける。すなわち本論文を、個々の作品をその個別性に着目して解釈する研究、彼の著作全体を「ロマン的イロニー」をはじめとする主要概念との関連で一貫して解釈しようとする研究、さらに 1990 年代から顕著になったメディア論的・文化技術史的研究という研究史上の 3 つの動向を統合し、断章テクストが持つ複数の解釈可能性と、書記行為の具体的実態との相関に着目して、断章の総合的解明をめざすものと規定する。

第 1 部第 1 章では、断章形式に関する研究史の概観に続き、シュレーゲルが初期（1792–1796）に書いた研究論文や書簡、さらに当時出版された書籍・雑誌を対象に、「フラグメント」の語の意味のひろがりについて分析する。特に 18 世紀末の出版文化や慣習に根差した一般的・標準的な語法に注意を払い、先行研究を踏まえながら〈抽象的・観念的断章〉、〈伝承に起因する断章〉、〈制作に起因する断章〉という三つの分類を設定し、実例を検討する。

第 2 章では、1797 年からアテネーウム期（1798–1800）までのシュレーゲルの遺稿や著作、書簡を対象に、この頃から顕著になる「フラグメント」の語の観念的、術語的な記述を分析する。同時代人からの思想的な影響関係を考慮しながらも、本論はシュレーゲルによる「本来的な断章」の着想を再構成することで、彼の断章形式の構想が古代の叙事詩の形式的特性に対する彼の見解と密接に関連していることを確認する。その際、特に文字メディアの機能的・技術的な観点から、口承文化における断片性と印刷・文字文化における断章の差異を明らかにする。さらに、シュレーゲル

による〈完結した断片〉という一見自己矛盾した定義が、物質的な資料の客体性あるいは書物の「物理的堅固さ」という特質を前提としているという見解を提示する。

第3章では、初期のシュレーゲルが自身の研究手法に関して書いた書簡、遺稿断章、公刊著作の記述を、読書革命期（1770–1800）における音読から黙読への読書形態の変化を背景に分析する。それを通じて、彼の手法の独自性を当時の文献学における習慣との比較から考察し、彼が断章の書記形式を自らの文体・書法（スタイル）として獲得していく過程を明らかにする。特に、資料の抄録や蒐集を伴う彼の読書が、当時の一般的な読み方とされる「孤独な読書」と区別され、書きながら読むことを常とする「専門的な読書」の系譜に属しており、さらに、シュレーゲルの書記行為において蒐集、編集、注釈などの作業が中心化した結果、〈資料〉の集積にこそ断章形式の成立の契機が含まれているという見解にいたる。

第1部と第2部の間に置かれた《間奏》では、シュレーゲルにおける書記性・文字メディアの問題を、古代哲学における直接的対話性を活字メディア時代の黙読文化のなかでいかに復活させるかという問いとの関連で取り上げ、シュレーゲルが断章形式をこの課題の解決にふさわしい形式と見なしているという仮説を検証する。

第 2 部は、手帳への書き込みとして残されたシュレーゲルの遺稿における筆記法を、彼が実践する多層的な書記行為の局面、すなわち「書記現場」の実態との関連で分析する。まず第 4 章では、文献学的技法に由来する書記現場を扱い、読む対象（書物）が欠けていても、文献学的技法において規則化・習慣化した〈読むこと〉に起因する思考法は書記行為に影響を及ぼし続けるという見解を導き出す。次に、余白の設けられた断章のレイアウトが、テクストを文献学的な考証の対象であるかのように読むことを誘引し、更なる批判的かつ発展的な書き込みを誘発する機能を持つと指摘する。

第 5 章では、書記現場において書き手を視覚的に操作・誘導するオペレーション記号のはたらきを、筆記法の枠組みにおいて扱い、特に下線を引くことによる語句の強調に焦点を当てる。ここでは、シュレーゲルにおける下線強調が、文章をその重要語句に即して二次的に読み返す所作の痕跡であるとともに、書き出された手稿を同時に利用可能な資料へと再編集する作業の一環でもあるという見解を示す。

最後の第 6 章では、より抽象的な概念操作の段階へ到達している断章的書記を取り上げ、記号表記を書きかつ読み取るという一連の行為と彼の思考とが、相乗的に速度を高め、抽象の度合を高めながら筆記を進行させていく事態を考察する。そこでは、定型句あるいは定型的構文、さらには略語法や省略記号が、シュレーゲルの筆記と思考のエコノミーを著しく高めていること、特に関係性を表示する定型句、略号や数式の使用が、異質なもののあいだに類比（アナロジー）による結合を発見する「機知」の原理に基づくシュレーゲルの思考と密接に関係し、彼の形而上学的思考が機械的な演算操作をモデルにしているという見解を示す。

以上をもって、本論文は、断章・断片が単なるジャンルとしてのみならず、具体的な書記法としてシュレーゲルの独自の思考の成立と展開に不可欠な形式であると論じ、結論とした。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

これまでのシュレーゲル研究、初期ロマン派研究においても、断章・断片という形式には特別な関心が向けられてきたが、そこでは、断章は何よりもまずシュレーゲルの世界観の表現手段とみなされ、もっぱら「ロマン的イロニー」や「発展的普遍ポエジー」などの美学的概念との関連で考察されている。一方、メディア論や文化技術史が 1800 年前後に完成した活字メディア文化システムとの関連で注目してきたのは、ロマン派における「想像力」や「幻想」などの側面である。これに対して、本論文はシュレーゲルにおける断章を、書記行為のひとつの実践形式と捉え、その観点から初期シュレーゲルが残した断章テクストに終始一貫した分析を加え、その実態を詳細かつ具体的に明らかにした。特に、文献学の訓練を受けたシュレーゲルが、いかにその伝統的手続きや発想を断章の書記現場に取り入れているかという点に注目し、これまでほとんど論じられることのなかった「文献学」と「断章」の間の連関を明らかにした。さらに、黙読文化が一般化した 1800 年前後にあって、シュレーゲルが古代哲学における対話の直接性と、それに基づく思考の展開を、どのように断章形式という書記を通じて再現しようとしたかという問いを論じ、断章形式とシュレーゲルの思考との結びつきを解明するための、新たな視座を提示した。

（２）論文の評価

本論文は、シュレーゲルが残した断章形式のテクストを、それが成立した現場に差し戻し、豊富な資料を手がかりに、そこに作用するメディア文化や文化技術上の諸条件を可能な限り具体的に再構成した上で、書記実践としての断章の諸相を包括的かつ徹底的に解明した。断章は、これまでの研究ではシュレーゲルが自らの美学思考に基づき選択した一表現形式と見なされてきたが、本論文は、彼の美学思考そのものが、断章を書くという具体的作業を通じてはじめて成立したという命題を高い説得性をもって示すことに成功している。本論文は、まずこの点において高く評価できる。また、シュレーゲルと古典文献学との繋がりは、従来の研究ではほとんど論じられてこなかったが、本論文は、初期シュレーゲルの断章を丹念に検討することにより、断章という書記形式が文献学的作業を通じて獲得されたことを明らかにした。さらに、断章に現れるさまざまな記号や定型表現がシュレーゲルの類比的思考様式にとって不可欠な書記記号であることを、テクストの緻密な分析によって解明した。以上の点から、本論文はメディア論、文化技術史の観点から今後のシュレーゲル研究の展開に大きく寄与するものであり、高く評価したい。その上で、シュレーゲルが繰り返し言及しているレッシングにおける断章形式との関係、数学的記号を思考表現のメディアとするノヴァーリスの断章書記との共通性と差異性について、更にはベンヤミンのロマン派論の内容ついて考察を深めてゆくことにより、本論文はさらに説得力を増すと思われる。